文章の技巧表現

2007.11.07 更新

はじめに

前回の最後に、接続詞「ので」と「から」の使い分けについて夏目漱石『坊っちゃん』の文章表現を示してその使用の異なりを考察することを勧めておいたが、お気づきになられたであろうか？その復習を兼ねながらもう一つ漱石の『硝子戸の中』第六章の文中に目を向けて見ておこう。

彼女が最後に私の書斎に坐ったのはその次の日の晩であった。彼女は自分の前に置かれた桐の手焙の灰を、真鍮の火箸で突ッつきながら、悲しい身の上話を始める前、黙っている私にこう云った。

「この間は昂奮して私の事を書いていただきたいように申し上げましたが、それは止めに致します。ただ先生に聞いていただくだけにしておきますから、どうかそのおつもりで……」

私はそれに対してこう答えた。

「あなたの許諾を得ない以上は、たといどんなに書きたい事柄が出て来てもけっして書く気遣はありませんから御安心なさい」

私が充分な保証を女に与えたので、女はそれではと云って、彼女の七八年前からの経歴を話し始めた。私は黙然として女の顔を見守っていた。しかし女は多く眼を伏せて火鉢の中ばかり眺めていた。そうして綺麗な指で、真鍮の火箸を握っては、灰の中へ突き刺した。

時々腑に落ちないところが出てくると、私は女に向って短かい質問をかけた。女は単簡にまた私の納得できるように答をした。しかしたいていは自分一人で口を利いていたので、私はむしろ木像のようにじっとしているだけであった。

やがて女の頬は熱って赤くなった。白粉をつけていないせいか、その熱った頬の色が著るしく私の眼に着いた。俯向になっているので、たくさんある黒い髪の毛も自然私の注意を惹く種になった。

この文中には、女と私の会話文二文があり、ここでは接続助詞「から」が用いられている。その後の私の彼女に対する観察描写では、接続助詞「ので」が用いられている。この接続助詞「から」と「ので」の使用意識の違いについて同じく考察してみるとよかろう。

谷崎潤一郎小説『細雪』と接続語

幸子は万事上方式に気が長い方なので、仮にも女の一生の大事をさう事務的に運ばうと云ふのは乱暴なと思ひもしたけれども、井谷に臀を叩かれた形になって、行動の遅い彼女にしては珍しく、明くる日上本町へ出かけて行って姉にあらましの話をし、返事を急かされてゐる事情などを打ち明けて云ってみたが、姉は又幸子に輪をかけた気の長さなので、さう云ふことにはひとしほ慎重で、悪くない話とは思ふけれども一往夫にも相談してみて、よければ興信所に頼んで調べて貰ひ、その上でその人の郷里へも人を遣って、などと、なか／＼暇が懸りさうなことを云ふのであった。

「つなぎの長さ」を持つ文章

―線を施したところが「つなぎ」の箇所である。「つなぎの長さ」で文章を書くとき、ことがらに

対する認識の有り様が色濃く表出し、その結果、物語的なニュアンスが加味することになる。この「つなぎの長さ」は、―線を施した接続語〔接続詞・接続助詞〕が利用されていることが理解できよう。

①「ので」
②「けれども」
③「て」
④「…をし」
⑤「なので」
⑥「…で」
⑦「のであった」

この①から⑦の接続語を構成する仕組みを理解しておくと、

○今日は天気が良かった。
○私は読書に熱中した。

という二文を一つにするとき、

●今日は天気が良かった。私は読書に熱中した。

のように、前後に並べて記述するときは、二つの事実を表すにこと過ぎないのだが、上記の接続語を用いて、

ア、今日は天気が良かったので、私は読書に熱中した。
イ、今日は天気が良かったけれども、私は読書に熱中した。
ウ、今日は天気が良かったし、私は読書に熱中した。

と文を一つに繋いでみると、書き手の気持ちや二つの事実に対する認識のあり方が表出してくるのである。実際に、アには、「天気がよい日は、読書に熱中できる」、イには「天気が良い日は、読書意外

のことをするのが普通だ。天気が良い日に読書に熱中するのは余りないことだ」、ウには、「天気が良くって気分も晴れやかだったし、読書に熱中してよい日だった」という気持ちが含まれてくる。

このことから、接続詞を用いて前後をつなぎとめることによって、ある意味の物語的なニュアンスが表現できるようになることが見えてこよう。作家谷崎潤一郎が、「つなぎの長い文」を好んで用いたことは、ある意味で物語る形態を意識していたからであろう。

この接続語の妙味を間違えると、とんでもないことになる。すなわち、文体に関する意識の希薄性が露呈し、出来事や実体験したことを思い出しながら書くと、「つなぎの長い文」が表出するのである。低学年の作文によく見受けられる、あれをしてこうして式の自分が行動したことを只単に時間的順序立てだけで述べていくと、まさしく「だらだら文」が生まれてくる。

物語性のニュアンスを、文章に表現しようとする意識＝「人の心を動かす文章を書くこと」がないのであれば、普通の文＝「あなたはそれをどう見ていますかという観察表現文、どう見ましたかという報告文」は短く切って書いた方が一般受けする文章表現となる。

たとえば、季節は折しも秋、教室の窓の外に高い「桂」の木があって、そこから落葉がハラハラ散っている。この落葉の落ちていく様子を見て文章を書く。このとき、自分の頭のなかで発露している様々な感情をそこには一切投影させない。ただ、ただ、自身の目の前で起きている落葉の落ち方を観察して綴るのである。このとき、落葉は葉っぱの先の方から地面に落ちていかないのか？付け根の方から先に落ちるのか、じっと見届けた事柄を書くのである。書く内容をどう感じたかは、ここでは要らないことに気付くことが大事なのである。ものをよく観る眼を養い、これをあるがままに書くことが普通の文章となる。

接続語「にもかかわらず」「にくわえて」「とともに」「とどうじに」「につづいて」「のほかに」「ものの」「だけに」「うえに」「するいっぽう」「しつつ」や、「…ので」「…ために」「…から」「…ことに

より」という理屈を連れてくることばなのである。「……が、……」を用いると、やたらめったら文章が意味のない繋がりを見せ始めるから要注意の語である。

「……という」「……について」「……に関して」なども避けたい表現の一つになる。曖昧な意見、判断をきっしと示さず、責任転嫁を諮ろうと企てる文がこの類である。

「短い文章」の効果

北条民雄『いのちの初夜』は、当に短い文を連ねて書き出されている。

月夜のやうに蒼白く透明である。けれど何処にも月は出てゐない。夜なのか昼なのかそれすら解からぬ。ただ蒼白く透明な原野である。その中を尾田は逃げた。逃げた。胸が弾んで呼吸が困難である。だがへたばっては殺される。必死で逃げねばならぬのだ。追手はぐんぐん迫ってくる。迫ってくる。心臓の響きが頭にまで伝わってくる。足がもつれる。幾度も転びさうになるのだ。

ここには、「逃げた。逃げた。」の繰り返し表現や「伝わってくる。足がもつれる」という現在止めが用いられていて、この繰り返しやたたみかける言い回しによって、その動きや切迫感・緊迫感が生み出されてくるのである。

では、一般受けする文の長さは如何ほどかと考えてみるに、週刊誌で書かれている文章が尤も標準値と言えるのではなかろうか。多くの読者に支えられ、興味を引く内容を必要とする。週刊誌トップ記事の文章から無作為に五〇文抽出し、文の中の句読点や括弧を除いた文字数によって、文の長さの平均値を測ってみる。この操作を何度ともなく実行していくと、凡そ、

二七から四三文字

のなかに、平均値の九五%が含まれているという結果が得られてくる。

そこで、自分自身がお書きになった文章から、五〇文を抽出し、字数を測ってこれを五〇で割って、文の長さの平均値を求めてみることにしよう。此の結果として、数値が四四以上であれば、文をもう少し短くすることで、より一般受けする文章に変貌することになるであろう。

長期記憶に書く鍵がある

日本人は、とかく「長期記憶をしまい」とどこかで記憶を断ち切ってしまう僻ごとが多い民俗かも知れない。ことわざに「人の噂も四十五日」と云うくらいに薄らぐことを願うのも好いであろうが、国際社会に身を置く現代の日本人には、この片付け方はやや問題を残すことになる。

佛經説話集『今昔物語集』のなかに、「萱艸と勿忘草」の譚があるのも、このどちらが今のあなたには必要なのかを問うているのである。そして、これまでの日本人にとって、苦しいこと、辛いこと、嫌なことなどが多すぎたのかも知れない。楽しいこと、嬉しいこと、感動したことであればずっと記憶に留めておきたいと願うのが人情だからだ。だが、人は後者を遺さない。むしろ悲劇や惨事のことを岩石に刻み後世に伝えようとする。「わすれなぐさ」の対象が後者ではなぜいけないのだろうか？この営みがこれからの日本人には大切になってくる。日本という国、そこに生まれ育ってどういう長期記憶を持ち、どういう問題を、どう処理してきたのか、これを問われていくことにもなる。きっちり伝え、きっちり覚えておく。人にこうしなさいああしなさいと指図されて動く時代は終わりにしよう！経済大国日本とかまんが王国日本などの冠を戴いても、自浄能力を発揮しない日本は困る。これは素晴らしい、これはまずいと確乎たる判断力が必要不可欠であり、間違ったり、行き過ぎた行動をしたときはきっちり謝る。これが国際社会に日本が加入できる条件でありその人材が当に必要な世の

中となっていることを伝えておこう。

長期記憶を現実の場に書き手が引き出してくることで、その書く内容も大きく変化し始めることに気付くこと、ここに技巧の鍵があるのだ。すなわち、「興味を引く書き方」なのである。

興味を引く書き方

興味は好奇心だけでなく、自分が必要とするものからも生まれる。この必要性を促すことが重要であろう。文章のはじめの部分に、「なぜ、このようなことになるのだろうか」といった問題意識を持たせるのも一つの方法だからだ。

具体的に書くこと、経験や知識を共有することで、親しみを覚える。人は手身近なことに興味を懐くものだ。そこで実験。

A　日本語表記の特性は、複数の文字体系、すなわち漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字の文字体系、さらに横書きにおいてはアラビア文字までも使用することになる。

B　日本語の書き表し方で、世界的に珍しいことなのに、案外、日本人が気づいていないことがある。わたしたちは、横書きのとき、

スミレは、スミレ科の多年生草木。高さ約10㎝。柄のある細い三角形の葉が根元からだけ生える。

のように書いて、特別のこととは思わない。しかし、この短い文のなかに、カタカナ、ひらがな、漢字、ローマ字、アラビア数字の、五種類の文字が使われている。英語では、文字はローマ字（ラテン文字）とアラビア数字の二種類だけだ。日本のように他種類の文字を使う国は、世界中探しても見つからないだろう。

このAとBの内容では同じことを説明するのだが、具体化したBは、かなりスペースは必要だが、読み手を惹きつける文章表現となるのである。

あとは、人間的興味は、民俗すべて等しいものでないことも留意したい。その要素は、表現を常に具体化し、人物を登場させ、会話文を交えながら書く。これまで努めてきたことを再度振り返ってみることでもある。